

池田良穂 (大阪経済法科大学)
(客員教授)の
新クルーズ学
 20

一度に数千人の観光客を運んでくる大型のクルーズ客船の経済効果はたいへん大きく、日本各地の地方自治体がクルーズ客船の寄港誘致に力を入れています。

今年も観光庁の「訪日外国人の消費動向の年次報告書」が7月に発行され、その中に訪日クルーズ客の消費額の調査結果が示されています。

調査は、博多港、長崎港、那覇港で行われ、調査員が上陸した客から聞き取ったもので、

本コラムの11回目に、この調査の最初の四半期の速報値を紹介しまし、この調査報告は2018年度全体の統計結果です。それによると、クルーズ客の1人あたりの消費額は4万4227円で、飛行機などでの訪日する観光客の1泊あたりの消費額2万5937円の1・7倍になっています。使用された調査票を注意深く点検してみると、船上で販売されて

いるオプショナルツアーの費用が含まれていませ



17万トンの大型クルーズ客船のオプショナルツアーのために岸壁に並ぶ観光バス群 (筆者撮影)

程度) 以外は寄港地のバス費用や観光地の入場料などとして国内に落とされることになるので、クルーズ客の消費額は3千円程度増えて、4万8千円近くになります。6〜8時間程度滞在の日帰り客なので結構な額と言えらるでしょう。

消費の内訳をみてみると、買物代が4万1527円とほとんどを占めています。調査がはずれもショッピング施設が整っている都会の港なのでこの数字になっていますが、地方港で町がシャッター街となっていれば当然消費額はぐっと落ちるようになります。すなわち、ショッピング施設の整備がクルーズの経済効果を上げるためには必須ということになります。消費内訳の第2位は飲食費ですが、その額は1928円。これは、朝に入港して夕方には出港するクルーズでは基本的に昼間の観光なので、昼食と喫茶だけのためです。費用を入れるべきなので、第3位の交通費は465円と低くなっています。

提供すれば喜ばれるに違いありません。さらに夜間観光をアピールしてもらうための必要、夕食を陸上でもとってもらえるようにできれば飲食消費を大きくすることが可能となります。

クルーズ客は宿泊をしますが、ホテルのレモーションというのにも良いか

クルーズ客は宿泊をしますが、ホテルのレモーションというのにも良いか

クルーズの経済効果が実証